

村田喜代子著

『鍋の中』(文藝春秋)

夏休みを一人暮らしの祖母の家で過ごすことになった十代の男女四人の孫達のひと夏の物語である。

主人公は十七才の少女、祖母は八十才。孫達はばらばらの写真のような祖母の記憶を掘り起こしていくのだが：

それによつて味わう親や大人達から受けるある種の不条理や大人の世界に対する戸惑い・葛藤を主人公の感性を通してわかりやすく伝えている。

炊事当番を引き受けた主人公が、煮物の好きな祖母のために毎日大きな古鍋で煮物をする。

「今日は何と何を炊いた」というくり返されるフレーズが平凡で日常的な設定の中で味をだしている。また、普通に人生を歩み普通に年を重ねてきたちよつとユーモラスな祖母の記憶そのものもいろいろな物が煮込まれた鍋の中を思わせる。

主人公はすべてを包み込む大鍋の中で浮き沈みする煮物を見

ながら先祖を想い、家族の絆を想い、自分へと受け継がれた生命のつながりを感じる。そして今のままの自分を受け入れようと変わっていく。

ひと夏が終わる頃には四人の孫達それぞれのたくましさも見る事ができる。

全体を通して夏独特の季節の色や情景が素朴でさわやかで、そして優しく描かれて

いてぜひ分前に読んで本なのだが一枚の絵のように蘇ってくる。

もう今時味わえなくなっているスローな時間の流れに思いを馳せて『鍋の中』を覗いてみませんか？

読書案内

小森陽一著

『言葉の力 平和の力』

— 近代文学と日本国憲法 —

(かもがわ出版)

本書で取り上げられている樋口一葉・夏目漱石・宮沢賢治・大江健三郎のうち、大江健三郎

はともかく、後の三人は日本国憲法とどういう関係があるのか？

と思つてしまいましたが、実は大ありだという内容の本です。

宮沢賢治の『鳥の北斗七星』

を例として取りあげてみます。

この童話は鳥と山鳥という同族同士の戦争を描く、第一次世界大戦前後の世界的な軍事情勢を反映した作品で、次のような内容の話です。

大尉の鳥には翌朝に敵を攻撃する任務がある。しかし、少佐になれば管理職なので現場の戦闘に出る必要はない。そこで大尉の鳥は非常召集作戦を敢行し、ただ一羽侵入してきた山鳥を殺す。その功績により鳥は少佐に昇進する。その後、鳥は自分の行為が正しいことだったのかと自問し、悩む。

この鳥の問い(悩み)は言い換えれば、正義の戦争はあるのかという問いです。アメリカ合衆国は「自衛」という名の戦争をヴェトナムで行い、原子爆弾の使用についても、戦争を終わらせるために使用した(正義の兵器)だと主張し、イラクにも侵攻しました。しかし、それは正しい行為なのか。鳥の問い(悩み)の射程はそこまであ

るということになります。

著者は一葉・漱石・賢治・大江健三郎の諸作品をていねいに読み解いていくことを通して、彼らが作品において追求した問題が実は日本国憲法の諸条文にリンクする問題であることを指摘していきます。非常にスリリングで示唆に富む本です。

910-K74-4

東野圭吾著

『使命と魂のリミット』

(新潮社)

「容疑者xの献身」で直木賞を受賞した東野圭吾の、「赤い指」に続く長編ミステリーです。帝都大学医学部を卒業した夕紀は、同大学の様々な部署で研修を受けた後、現在は心臓血管外科にいます。この部署が夕紀の最終目標であった。

「あたし、医者になる。医者になって、お父さんみたいな人を助ける」と夕紀が決心したのは、中学三年生のときだ。彼女の父は、胸に巨大な大静脈瘤を抱えており、それを切除する手

術がうまくいかず、他界していたのだ。彼女が医者を目指した動機、そこに人命救助への強い思いがあったのは嘘ではない。しかし、もう一つ別の大きな動機が彼女にはあった。それは決して他人に気付かれてはならないもので、指導医はもちろん、母親にさえも隠しているものであった。

そんな中、病院へ「医療ミス」をすべて公表し、謝罪せよ。さもなければ病院を破壊する」という脅迫状が届く……。

ここに登場する人物たちは、それぞれの思いを胸に「自分の使命」を全うすべく生きています。果たして、私の使命って何なのだろう。その使命を果たそうと努力しているだろうか、と考えさせられます。東野圭吾の作品は、ハッピーエンドが少なく、この作品も全編を通して人々の悲しい思いが渦巻きます。しかし、最後の一行の夕紀の台詞に心がほろっと救われます。他著の「秘密」「手紙」もお勧めです。

913-H50-7

佐藤多佳子著

『一瞬の風になれ』

(講談社)

中高生の頃、日記をつけていたことがある。日々の心の揺らぎを記したそれは、後年読み返すと、汗顔の至りでとても読めたものではなく、慌てて火葬に付してそれ以来日記を書く習慣からは疎遠になった。代わりに読書記録だけは若い頃から残しているが、その頃、何を考えながら読んでいたか思い出されてそれなりに興味深い。

例えば十年前は加賀乙彦の「永遠の都」、二十年前は村上春樹の「ノルウェイの森」、高校生の頃はヘッセやサリンジャーの作品が並んでいる。中学生の頃、教師に薦められて夏目漱石の「三四郎」を読んだが、あの微妙な恋心は当時の私にはさっぱり理解できなかった。やはり、読書にもその時に読むべき「旬」の作品があつて、その年齢だからこそ心に訴えかけ、忘れられない輝きを伝えてくれるのだと思う。

その意味で現代の高校生にお薦めできる一冊が(実は三冊だが)この作品。陸上部で短距離を走る主人公の三年間を丹念に追った本書は、単なるスポコン小説に終わらず、誰もが経験する高校時代の様々な思いを再現してくれる。才能に恵まれた者も恵まれない者も、環境や偶然や己の性格から来る制約の中で精一杯に生きる姿は、あなた自身の高校生活とも共鳴して、人によって色々な音色を響かせてくれるのではないだろうか。

913—S84—1—3

木村元彦著

『オシムの言葉』

(集英社インターナショナル)

二〇〇六年、サッカードイツW杯。一勝も挙げる事ができず、「ジーコジャパン」は幕を閉じた。その日本代表の後任監督に指名されたのは、低迷していたジェフ千葉を大躍進させた名将、イビツァ・オシムである。海外での豊富な経験、Jリーグでの実績、そして、彼のユニークで哲学的な「言葉」が人気を集め、国民の期待を寄せている。オシムは八六年よりユーゴスラビア代表監督に就任して、ユーゴ分裂の九二年まで指揮を執った。多民族国家で、情勢も不安定であつたこの国の代表監督としても、彼は自身のサッカー哲学を貫き、祖国をイタリアW杯ベスト8に導いた。当時のマスコミとのやり取り、オシムの下で育った選手達のコメントなどがこの本に記録されているのだが、そこからも彼の人格、発想、感性が見え、一部ではあるが読み取ることができただろう。はつきり言つて私はオシムの考え方に一〇〇パーセント同調することはできないのだが、感心させられた事も多い。その一つが監督として、選手のモチベーションを高める方法である。彼曰く、その方法は何千通りもあり、人それぞれ違うのだが、彼が実践していることは、選手が自分達で物事を考えようとすることを助けてやること、だそう。この手法は、サッカーというスポーツに限ったことではないだろうし、スポーツ以外のこ

とにも当てはまることではないだろうか。「オシムの言葉」はサッカーに縁の無い人にも楽しめる一冊であると思う。

783—K8—1

① 山口昌伴著

『水の道員誌』(岩波新書)

② 加藤 仁著

『定年後』(岩波新書)

①はタイトル通り、水に関係する三十余の品目を取り上げたもの。第一章の「水を楽しむ」では、花に水をやる如露(ジョウロ)、時間を飲む水出し珈琲抽出器、文房四宝の水の器の水滴など。ポルトガル語のジョウロに「露の如し」と当てた日本人の素養の深さに言及。如露の生命は蓮口の穴であると指摘しているが、尤もなことである。第四章の「水の道」では水の道・水づかいの作法を今に伝える三分一湧水、わが家のウォーターフロントの川戸など。湧き水を三つの村に均等に分けて水争いを回避した三分一湧水は現在も八ヶ岳の麓に残る。掲載されている写真を見て、私は即座に見学

に行くことを決めた。一品につき四〜八頁の簡潔な説明だが、必ず写真がついていて有難い。

②は二十五年もかけて三千人以上の退職者を取材した結果生まれた本。八十歳になったときに、「サフリーマン時代はリハール、その後の人生が本番だった」といえたら、定年後の生活が充実していたといえようが、この本にはそれに該当する人々が続々と登場する。本当に好きなことに没頭する人、スキルを活用して地域のために働く人、外国で活躍する人もいる。底力を発揮し、逞しく生きていく人が多い。定年を迎えるまでに働く労働時間は約八万時間。その後八十歳まで生きるとして余暇時間は八万三百時間という。無為に過ごすわけにはいかないと痛感した次第である。当面は「定年」とは無縁の高校生にも勧めたい。元氣が出ます。君は今を生き生きと生きていますか？この二冊の本は新書ではあるが、膨大な時間をかけて書かれた、中身の濃い労作である。

① 383—Y3—1

② 367—K17—1